

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記 2021・2・4



庭の梅が見ごろを迎えようとしています。蠟梅は薫りを弱めてしまいましたが、白梅は満開となり、あとは隣の紅梅の開花を待つばかり。もう1週間もすればフキノトウも顔を出すはず。春への胎動が土の中では始まる2月となりました。風によって1カ所に吹き寄せられていた落ち葉のヤマを掃除するためにシャベルを入れたら、なにやら妙な感触です。げんこつ大のツチガエルが現れました。冬眠のさなかだったようです。

こんな落ち葉や枯葉のなかでも良いのだとビックリするとともに、思い出しました。里山写真家の今森光彦さんが造る滋賀県大津市の「オーレリアンの庭」のこと。その洒落た名前は、蝶や生き物が大好きな今森さんが名付けた「蝶を愛する人」の意味。雑木林と草花に囲まれた土地に家を建てての里山暮らしを楽しんでいる今森さん。NHKのBSで、四季ごとのドキュメンタリーとして放映されていたのですが、そのなかでこんな話がありました。

雑木林の枯れ枝や小枝を伐採したあとに、それらを束ねて数カ所に置くのだそうです。そうすると、風に舞う枯葉や落葉がそこにせき止められてこんもりとしたヤマが出来、生き物たちの寝床や、冬眠の格好の住居ともなるというのです。蝶が大好きな今森さんは、成虫のまま冬眠するイチモンジチョウのためだよ、と確か言っていたのではなかったか、トノサマガエルが入ることもあるとも。風が吹くと、枯葉が落ちて、枯葉は土を肥えさせる。そして、その土が米や作物や果実を実らせる。本当にゆっくり、ゆっくり、気の遠くなる時間を費やして、枯葉一枚でさえ、土に栄養をもたらすだけでなく、生態系の循環に役割をはたしているんだよ、と今森さんは語っていた記憶があります。土は偉いのです。

「土の偉大さ」を考えると、「田んぼの価値」はいかほどか、ということも考えてしまいます。間もなく、開発を手掛ける事業者から、桑原の農家1軒1軒に開発計画の説明と「田んぼ」の購入価格の提示が始まるはず。田んぼの相場価格については私は分かりませんが、一般に、土地の値段というのは、面積で比例するわけですが、その地面の上にどれだけの空間を持てるか、その空間がどんな価値を生み出せるのか、というのが判断基準になっているようですね。でも、「田んぼ」や「畑」については、ちょっと待て、と言いたいと思うのです。その「土」の下に隠れている土壌の豊かさの価値を評価しないのか、という問題です。桑原の「土」は、きれいな水に恵まれ、化学肥料や農薬に痛めつけられることも少なく、まさに「生きた土」です。だからこそ、メダカをはじめ、貴重な動植物が豊かな生態系を醸し出し、生物の多様性が守られています。代々に渡り、その「土」を守り続けてきた農家の皆さんの汗も吸い込んだ「豊かな土壌」でもあります。これは、相当の付加価値とみてよく、相応の価格になるべきだと思いますがどうでしょう？建築物を建てる際の地盤とは考えないでほしい、そう思います。「土」は、いのちの基盤「食」のための「食糧庫」なのです。

まあ価格はともかく、「ウチは売らない」と断言されている農家もあるので、開発計画も進められないと思いますが、事業者にも、小田原市にも、そうした貴重な土地を消滅させようとしていることが、どんなことなのかをじっくりと考えてもらいたいと思うのです。

「生きる」ということに直面させられているコロナ禍のこの時代、いちばん大切なことは開発による「利」なのか、それとも、「土」の恩恵による「食」の確保なのか。

「土」は、食糧庫です。